

二〇一四年、新年を迎えて！

本年もいい年ありますようにお祈りします。

年のはじめをお迎えして、皆様には新しい夢を抱かれていますとお慶び申し上げます。

昨年は、二〇一〇年、東京オリンピックの召致が決まり、わが国民が期待と不安に驚かさされたり、台風で高島が被災したりして、悲喜こもごもの一年でした。でも一年が長いもので、うれしいこと哀しいこと何かが起こります。そんな出会いが、人を成長させてくれます。

私も、五十五歳、半世紀生かされていただきました。その間、うれしいこと、悲しいことつらいこと、... いっぱいあったなあと思ひ出します。そのときに出会った人は忘れることがありません。支えられ、怒られ、励まされた記憶がよみがえってきます。今から思うと良い思い出であり、人と人とのつながりのお陰です。年若い方が、無念の死に遭われていること自体、つらいことです。この世に生まれ出た命、できる限り、長生きしていただきたいと願う気持ちでいっぱいです。

人は、一人では生きられないのが真実です。お父さん、お母さん、兄弟、姉妹、ご近所の方と多くの方に支えられて、この世に存在するのです。一人で生きていられる方は、哀しいです。人と人がつながっているから生きる喜びがあるのだと思います。仏教には、慈しみの眼で世間を観れば、すべての人々が救われると説かれています。命を大切に生きていくってほしいです。今日の日に命があるのを感謝して、今年一年、生きがいを持って暮らしていただきたくです。

今年もまた、年を重ね



ていくことは大変ありがたいことです。これからも、もっとたくさんの人たちとの出会いを求めて、触れ合っていきたいと願うばかりです。

もうこりた 忘己利他

ある日のことです。ある男性が友人を訪ねてきていました。

私が知っている家に8人の子どもがいて、長い間、何にも口にしていないのです。その男性は、とりあえず夕食のために用意してあったお米を持って、その家族の元に出かけていきました。そこには、栄養失調でやつれはて、目が飛び出して見え、お腹が異様に膨らんでいる小さい子どもたちがいました。お腹をすかしている子どもを見ることほど、母親にとつてつらいことはありません。母親は友人に手を合わせて感謝しました。友人は、早速米を炊いて子どもたちに食べさせてやるのかと思いましたが、母親はその米を二つに分け、そのうちの一つを持って出かけていきました。しばらくして母親が帰ってきたときに尋ねました。

「どこへ行っていたのですか。」すると母親は応えました。

「あの人たちもお腹をすかしているんです。」あの人たち？それは隣に住む家族のことだったのです。

そこにも同じくらいの子どもがいて、いつもお腹をすかしていました。そのことを母親は知っていたのです。母親は自分の子どもが極限までお腹を空かせているにもかかわらず、他のかわいそうな人にも分け与えたのです。その家族はとても貧しかったのですが、与える喜び、そして分ち合う喜びに満ちていました。母親のしたことがわかっていたのでしよう。どの子どもたちの顔にも、きらきらと笑顔が輝いていました。

慈とは、いつくしみの心であり、人々の幸せを願う心である。悲とは、人々の声にならない

うめき声を聞き取り、救わずにはおれない心である。

会社や地域の為に笑顔を忘れず生きがいをもって、混沌とした世相を「もうこりた」といわずに少しでも自分の周りが明るくなるように一人ひとりが努力精進して奉仕していくことが、己を忘れて他を利用する菩薩行である。



ねんじゆ 念珠の話

木木患子経という經典にとかれています。難陀国の波琉璃王が、民衆の苦悩を救うために我々にできる修行法を教えてください。と釈尊に願いました。

すると釈尊は、「もし、煩惱、業苦を滅し去ろうと欲するなら、ムクロジの実を、百八個貫き通して、輪をつくり、それを常に持って、行住坐臥で修行して、一心に仏法僧三宝を唱えてムクロジの実を一つ繰り、また唱えて一つ繰るといふことを繰り返さない。そうするならば、煩惱、業苦が消滅し、功德が得られるであろう。念珠を一般人に使われるようになったのは、鎌倉時代といわれています。

私が使用している念珠は、親玉2個、主玉百八個、小粒4個です。そして、念仏や礼拝の数を繰るので、それが、功德を積むこととなります。

トムさんの写真展

去る十一月二十九、三十日と十二月一日の三日間、「Tomas Suabさんが「風と土の交響」に参加されて会場を玉泉寺本堂で行いました。

トムさんは、数年前、本堂の写真を撮っていただいた縁で、実現したことになります。高島の自然の美しさを、カメラで取り、人々に見てもらうために玉泉

寺を選んでいただきました。写真集を発刊され、展示もなされました。鑑賞者は、延べ百人を超える方々が、お寺に足を運んでいただきました。最後に、いっぱい感動を与えていただきありがとうございます。ございました。

彼岸に生きよう

生死を此岸となし、涅槃を彼岸となし、煩惱を中流となす。菩薩は無想の智慧を持って禅定の舟舟に乗り、生死を此岸より、涅槃の彼岸に至る。

9月は、暑さ寒さも彼岸まで、春秋2回の彼岸は共に季節の変わり目、殊に秋は厳しい暑さから解放されて、爽秋の季節に、また春は寒さから暖かきの楽しみに移ります。

現在の祝日法は、春分は自然をたたえ、生物をいつくしむ。秋分は、祖先をこうやまい、亡くなった人をしのぶ慣わしが残されています。

祖先を忘れ、親を思わぬ者の生活は乱れます。日々これ此岸の中に浮き沈みするお互いが、与えられたそれぞれの場を通じて、四恩報謝、現前直下の自己にいかにか充実していくか、自らを叱り、自らを見つめ、真実の智慧を共にして精進するとき、此岸の世界を彼岸に変えていきます。

生死の苦界の世界に、智慧の火を灯して、彼岸に生きる生活に精進してまいります。

「びんずる会」の活動

写経をして、心の修養をしますので、皆様のご参加をお待ちします。参加してみようと思われる方は、電話下さい。

発行者 高島市安曇川町田中三四五九 天台真盛宗玉泉寺 木村 哲基 電話 〇九〇―三七〇八―七二〇六 Eメール svka37375@leto.eonet.ne.jp